

山々に咲く樹々の碧い花びらが風に吹かれて舞っていた。ひとつまみ握ると掌が碧く染まり陽射しに輝いた。草花もまた変わらず、咲き誇り空に向かって顔を向けていた。

小屋から見える景色は流麗とも呼べる可憐さ、儂さを感じさせ、手にした泡の様な希望がゆっくりと私の身体に沈み込んでいく。やがて朝から夕まで変わっていく空は美しく輝いているだろう。

「はあ、どうしてこんなことになったのかなあ……。いつも笑っているだけなのにな」

翠の蔦が小屋の隣にある巨木に絡まっている。空に向かって伸びている姿はまるで過去の賢人が空への向かう方法を模索した結果があるみたいだ。ハンモックに乗って樹々から流れてくる風に身を任せてゆったりとしている私は暇つぶしにいろいろと考えている。

「暇だ……」

呟いていても意味なく、景色を見ても意味なく。傍にいた人を想っても意味なく。

まあ、と零した彼女はハンモックの下で答えてくれた。私はいない彼女の影に囁く。

「どうして、貴女は私についてきたの？」

ぴよんと身体を飛ばして私の顔の上に乗った。小さな小さな栗鼠が水色の毛色に染まった体毛を自慢気に私に見せた。言葉を使えないから表情と仕草で、嬉しいと教えてくれた。頬を緩ませそつと私の頭に、採ってきたどんぐりを転がした。

「美味しい匂いがするね。食べていいのかしら」

「そこのお嬢さん。わたくしめが綺麗な星空を作りましょうか？」

無視。

「わたくしめがとても紳士的だからですか？」

無視。

「ああ、わたくしめに過酷な試練を与えた神という存在を酷く醜いと思わさせるのが狙いなのですね。わかりました、わたくしめから謝らないといけませんね」

むし。

「お嬢さん、こんにちは。わたくしめは紗良と呼ばれている存在です。この世界にただ望んでいる一つの希望とでも呼べば良いでしょう。きっとあなたはこれから大変な目に遭うのです。だから来たのです」

虫。とりあえず、うるさいです、と言いたくなる。

「わたくしめのことを信用できましたか？」

笑顔を浮かべているとは言えないにこやかさで私をまじまじと見て好奇心を満たしたらしい。どんぐりを右手から左手へ、左手から右手へ転がして頭に乗つけていた。

「栗鼠のことを信用も何も……。でも、少しは頭の上にあるどんぐりを吹っ飛ばしたいぐらいに信用が失墜したのは間違いないわね」

「そんなあ。わたくしめだって頑張ったんですよ」

「私の娘が栗鼠の着ぐるみを持っていたからね。だからよ」

なるほど、と栗鼠さんに細やかで邪悪な笑みが頬を歪めながら浮かんだ。恐怖は感じないが栗鼠は悪戯を思い描いたのか、私の顔にどんぐりを乗せる。今更ながらだがどんぐりは樹々からハンモックの下に転がっていた。

「じゃあ、わたくしめがあなたさまの娘さんになればよろしいですね」

お母さん、と呼ぶ声が聞こえて栗鼠さんは驚いて頭から転がっていった。全く、無駄な時間を経た。

「どうしたのー」

どんぐりを拾ってきてー、と間延びした声でハンモックの下にあるどんぐりを集めようとしたら、

「一緒に集めましょ、お母様」

「……はあ」

嫌になつてしまふが仕方なしとあきらめる。栗鼠が喋っているなんてありえないと思ひながらも郷愁感に溺れる。

——こんなことになるなんて思わなかった。

ふと、昔を想う。栗鼠を飼っていた自分がいた過去に想いを馳せる。ありえないけど、でも幸せだった今と昔。ありえていたけど、でも絶望だった今と昔。交錯する想いは一体と言葉に

尽くせない。今でも思い出せる。昔だったら思い出せなかった。

だって、時代を歩き来するなんてできるわけないから。

だから思い出は輝く。

だから未来は亡くなる。

今でも過去でも変わらず、意味もなく。

そして思った。

——あの人に出会ったのはそんな望みを抱えていた頃だったと。

「お母さーん。どんぐりまだあ？」

愛娘が手のひらを握って笑顔を浮かべながらスリッパを履いて走って来た。きっと空でものんびり見ていたお母さんが情けないとじようろを持って雨でも降らせたのだろう。栗鼠を見つけて投げてきた水を私はかわす。

「あーあ。外れた。お母さん、誰と話していたの？」

「ん？ 自分という偉大なる神様よ」

「じゃあ、お母さんはクズでバカでアホでどうしようもないダメ人間なんだね」

「お母さんという偉大なる神は今日の夕食を外食でフレンチを一人で愉しんでいるそうですよ」

「ごめんなさい」

「いいじやろう。ならもつと謝るべきである」

「ごめんしやい」

「もつともつとお！」

「ごめん以下略」

「そんな言葉どこで覚えてきたの」

「空の空」

「意味が分からないわよ。はい、どんぐり」

「以下略」

「もういいから。持っていきなさい」

「はい！　じゃあ、今日のお母さんのご飯はどんぐりだあ！」

「まてえい！」

と、微笑ましき光景を自分から自分を幽体離脱させたかのように俯瞰すると手にしたはずだったお父さんがいなくても幸せであるんだなって思えたのなら今はまだ言わなくてもいいだろう。いずれ愛娘が大きくなったら話せばいいだろうと思った。